

論文 Article

ものづくり大学のFD推進活動と建設学科英語 Pre-Intermediate クラス運営

原稿受付 2016 年 9 月 29 日

ものづくり大学紀要 第 7 号 (2016) 10~14

金美紀*

*ものづくり大学 技能工学部 建設学科 非常勤講師

Promotion Activities of Faculty Development at Institute of Technologists
and Management for a Pre-Intermediate English Class at Dept. of Building
Technologists

Miki KON*

*Dept. of Building Technologists, Institute of Technologists.

Abstract

Institute of Technologists started promotion activities of Faculty Development (FD) in 2008 and the committee for FD promotions was organized in 2010. In this study, management for a Pre-Intermediate English class at Dept. of Building Technologists is examined to check important elements for English teaching against FD at Institute of Technologists. This study will be the very first step toward systematic FD activities for English classes at Dept. of Building Technologists in the future.

Key Words : class management, Faculty Development, student-centered, Team-Based Learning

はじめに

日本の大学では 1980 年代から大学教育学会を中心に Faculty Development (FD)に関する議論が始まり、2008 年度からは文部科学省の通達により FD 活動の義務化が行われた。英語教育における FD 活動の取り組みが早い大学では 2007 年度に習熟度別クラス編成などが開始されている¹⁾。ものづくり大学では 2010 年に FD 推進委員会が設置され²⁾、2011 年の大学機関別認証評価においてもその活動が認識・評価されている³⁾。本考察の目的は、本学の FD 推進活動の目的や課題を積極的に理解し、2016 年度第 2Q に担当した Pre-Intermediate クラスの運営内容を、クラス・アンケートをデータとして FD 活動と照合することにより、自己点検・評価活動の一環⁴⁾とするとともに、将来的には建設学科の英語授業運営において組織的な FD

活動を行うための第一段階とするものである。

ものづくり大学のFD推進活動と英語学習

本学では 2008 年 12 月に「FD 活動のポイントと事例」に関する講演会が開催され、「教育改革への取り組み」を目的とした他大学視察や、「教育現場の問題点はなにか」「教授法の改善を図るには」「授業以外の学生へのサービス」などの一連の FD 講演会を経て 2010 年に FD 推進委員会が発足した²⁾。授業評価アンケートや研修会などが学部運営検討委員会を中心として実施されており、大学全体としてより充実した組織的な取り組みが望まれている³⁾。

2.1 ものづくり大学のFD活動目標

本学の FD 活動の最終的な目標は、学生と企業

の両者の意見を取り入れて「質の保証された学生を卒業させること」²⁾とあり、本学の理念にある「技能・科学技術・社会経済のグローバル化に対応できる国際性の重視」と併せて考えても、事実上の国際共通言語となっている英語の教育を今後さらに充実していく必要があると考える。

2.2 FD 研修会における改善すべき課題

課題の中には、英語教育分野においても重要な要素が複数挙げられている。「教員の授業について」ではまず「自ら学ぶきっかけを与えることが重要。」²⁾とあり、英語を学ぶ上での個々の動機づけを図るオリエンテーションや興味を喚起する課題の選択が効果的である⁵⁾。「対話を使った授業など工夫が必要。」²⁾では、講師中心型の講義形式から学習者中心型のインタラクティブな講義形式への改善により学習者のコミュニケーション力を向上させる授業⁵⁾が求められていると考える。「学生に自信をつけさせる必要がある。笑い声の出る楽しい授業を心がけるべし。」²⁾では、学習者が自らの成長を実感できる授業の実施と、「英語学習における楽しさとはなにか」⁶⁾や、「楽しさ」に付随する学習効果が問われている。最後に「期末試験が組織的でない。評価に公平性がないとの批判がある。」²⁾とあり、期末試験を複数の講師がクラス別に運営する場合に最も注意をしなければならない「公平性」が問題となっている。

2.3 企業からの要望

本大学の優れた特徴として地域、企業との連携・協力あるが³⁾、第9回教育研究推進連絡協議会とものづくり大学埼玉県地域連絡協議会の会議での「基礎学力をしっかり身につけ、コミュニケーション能力を強化して欲しい」²⁾という企業側の学生に対する要望と「グローバル化に伴う英語教育の充実」²⁾は、建設学科の英語授業において2009年度から目標としてきた学習成果として追求している課題であり⁷⁾、今後の教科書選択やシラバス改善においても考慮すべきである考える。

これら英語学習にも関連する目標や課題が今回の考察を行う大きな動機となった。

2015年度からの建設学科英語授業

建設学科の英語授業は本学紀要第5号、6号において報告のように従来は100名以上の大規模クラスで運営されてきたが^{5) 7)}、2014年に学内委員会にて検討が行われ、2015年度からは習熟度別の3クラスに分かれ3名の非常勤講師によってクラス運営がなされている。英語教育にとって望ましい、より小規模のクラス運営⁷⁾が開始されたことは大きな改善であり、FDの定義にある「授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な活動」⁴⁾のひとつとして、より充実したクラス運営が期待できる。

2016年第2Qの英語授業

1.1 習熟度別クラス

2016年第2Q開始時の履修登録者は157名、そのうち建設学科は1年生138名、2年生6名、3年生5名、4年生7名、製造学科は3年生1名であった。6月15日に実用英語検定方式の習熟度分けテストを実施し、受験した138名に未受験者19名を加えてElementary（初級）52名、Pre-Intermediate（以後Pre-I、準中級）52名、Intermediate（中級）53名の3クラスに分割した。シラバス、使用教科書は全クラス統一のものとし、各クラスのティーチング手法は各講師の特色を活かしたものとなっている。特筆すべき点は第2Q~4Qを通した全体の運営方法で、各レベルのクラスを毎クォータ違う講師が担当するため、ほとんどの学生が異なる3つの手法の授業を受講することができる。これは大学からの指導によるもので、各クォータの担当期間が実質7週間と短いため個々の学生と講師のラポールを築きにくいのが難点だが、期末試験評価においての不公平が生じる可能性も少なくすることができる。授業は6月22日から7月27日までの毎週水曜日3限と4限に6回行われ（実質授業時間：18時間）、第2Q最終日8月3日にクラス別で期末試験が実施された。

4.2 2016年度第2QPre-I クラス

筆者が担当した Pre-I クラスは英語学習環境としての規模的には大きいため、これまで実績のあるグループワークを応用した手法により⁵⁾授業を行った。具体的には学習者中心のアクティブ・ラーニング手法のひとつであるチーム基盤型学習法 (Team-Based Learning : TBL) を導入し、チーム毎に課題に取り組み得点形式でチーム順位を競うものである。TBL の原則である適切なチーム編成、運営管理、各学生がチームへの貢献に責任を持つこと、講師からの適切なフィードバック、学習の成長を促進する課題の準備⁸⁾を目標として計画、運営を行った。課題は教科書からのみではなく、受講者の興味を喚起し専門分野の英語も習得できるように、洋画や洋楽などの生教材 (authentic materials) や建設用語学習など多様なメディアを使用して作成した⁷⁾。期末試験の受験者は39名、本考察のデータとなった2回のクラス・アンケートの回答者は受講開始時が37名、終了時が39名であった。

4.3 クラス・アンケート

4.3.1 初回アンケート

授業開始時のアンケートは3クラス全員を対象としたもので、英語学習についての経験や好き嫌いを質問した。Pre-I クラスの回答は、「英語が好き16%、嫌い59%、どちらでもない24%」、「英語が得意3%、苦手68%、どちらでもない24%」であり、全体として英語学習を苦手とする意見が多く、理由としては「めんどくさい」「覚えるのが苦手」「理解できない」「高校の先生が嫌いだった」など、中学～高校での英語学習の影響がうかがえる。英語資格に関しては英検準2級取得者が1名、3級は4名、4級は6名のみで「持っていない」が大多数の26名であった。日本の高校生の英語力は2002年以降の低下傾向が顕著であるとの研究もあり⁹⁾、本学にのみ特徴的な傾向ではないと考える。個別意見として、「大学では楽しい授業を期待する」という声が複数あった。

4.3.2 最終回アンケート

最終回のアンケートは Pre-I クラスを対象とし

たもので学習内容や運営に関して意見を集約した。英語の重要性に関しては「意識が高まった59%、変化なし38%、わからない3%」とあり、授業の中で英語資格 TOEIC の社会的重要性や、建設業界での英語力の必要性などを繰り返し提唱した効果がある程度出ている。グループワークは「効果的62%、まあ効果的31%、効果的でない8%」とあり、「やる気が出た」「競うのが楽しい」といった意見に対し「参加しない人がいる」という TBL のマイナス要因も見られた。建設用語学習は「効果的67%、まあ効果的26%、効果的でない8%」とあり「必要性を感じた」「役に立つ」などの意見があった。全体としてグループワーク、専門知識に関しては概ね好意的に受け止められていると考えることができ、授業内容に関する記述式の意見では「楽しかった」「面白かった」という感想が17名から寄せられ、その根拠として「友人と協力できた」「リスニング力が上がった」「課題に興味を持った」などの意見があった。また「先生が親しみやすい」「クラスが静かでよい」「集中できた」など基本的には言語学習に必要なリラックスした良好な学習環境を保つことができたと考える。一方、学習者の英語力については「上がった49%、変化なし51%」とあり、学習成果の顕れに関しては第2Qの実質18時間の授業のみでは期待できず、シラバスにあるように第3・4Qを通じて継続的な学習が必要と考えられる。

5. FD 推進活動との照合

5.1 ものづくり大学のFD活動目標について

「質の保証された学生を卒業させること」²⁾に関しては、建設学科の現状としては1年生の第2Q~4Qのみ英語学習がカリキュラムに組み込まれているが、長期的な計画として将来的には2~3年次に継続した英語授業を行うことが望ましいと言えるだろう。これは「技能・科学技術・社会経済のグローバル化に対応できる国際性の重視」²⁾にも関係することで日本人が実用的なレベルの英語力を習得するには2000~5000時間の指導が必要とされている⁹⁾中で、大学時代に1年生のみの授業だけでは学習時間が圧倒的に不足するからである。現

行のカリキュラムにおいては1年生の間に英語の重要性を深く理解してもらえる授業を心がけているが、学生に対し継続的自主学习方法⁹⁾を授業内で指導する必要があると考える。

5.2 FD 研修会における改善すべき課題について

「自ら学ぶきっかけを与えることが重要」²⁾に関しては、学生ひとりひとりにとってなぜ英語が重要なのかを考えてもらう機会が大切であり、Pre-I クラスでは初回授業において本学にも関係の深い清水建設株式会社の「シミズドリーム」の英語ビデオを上映し建設業界の国際性を紹介するなど建設学科の学生に適した教材⁷⁾を選択した。さらに「対話を使った授業など工夫が必要。」²⁾では積極的に学生とコミュニケーションをとり個々に学習意義を問うことなどが重要と考え親しみやすく話しやすい雰囲気を作った。「学生に自信をつけさせる必要がある。」²⁾では、チームで協力し問題解決をすることで達成感とともに英語力にも自信をつけてもらうために TBL を導入しているが、レベル毎に適切な課題の選択など今後の工夫が必要である。「笑い声の出る楽しい授業を心がけるべし。」²⁾は、授業内での静と動のメリハリを心がけた結果、講師の講義中は静かな環境を保ち、課題に取り組むときは談笑しながら活発に話し合える自由な雰囲気作りができた。英語授業における「楽しさ」に関する研究によれば、安心して参加できる環境で理解する楽しさが土台となって、教科書以外の学びや課題ができるようになる楽しさと、英語を実際に使ってみる楽しさが繰り返し循環すると、熟達度を上げていくとある⁶⁾。講義で理解し、チームで学び、課題で結果を出す TBL は楽しい授業作りに適した手法のひとつと考えられる。また期末試験の公平性に関しては、講師ミーティングにて2016年度第3Qから各クラスの期末試験に統一の問題を部分的に取り入れることを協議し、3 クラスを通してより公平な評価ができるよう改善が計画されている。

5.3 企業からの要望について

「基礎学力をしっかりと身につけ、コミュニケーション能力を強化して欲しい」²⁾に関しては、将来

的にはシラバスを改善し長期的な英語学習が可能になると理想的だが、現状としては第2Q~4Qの限られた授業数を最大限に活用することと、発話を重視した学習者中心型の授業を充実させていくことが重要と考える。具体的には、現在毎クォータ初回授業時に実施しているレベル分けテストを第2Q開始時のみに減らし、各クォータの期末試験の結果を次のクォータのレベル分けに反映する案や、スピーキング指導を得意とするベテラン講師からのアドバイス、トレーニングなどが可能である。また、「グローバル化に伴う英語教育の充実」²⁾については、2017年度から、国際化を考慮して比較的新しく開発されかつ実績のある教科書に変更していくことを検討中である。これらの事項は英語非常勤講師3名が協力して調査検討しており、今後学内委員会に提言していく予定である。

6. まとめ

本考察で本学のFD活動と建設学科Pre-I英語クラスの運営を照らし合わせたことで、建設学科英語授業全体の課題が明確になり、将来的に建設学科英語としての組織的なFD活動が必要であることが確認できた。このことは2009年度から英語講義を担当している筆者にとり非常に有意義な試みであった。建設学科の英語授業運営においては、学内委員会の指導のもと、近い将来に組織的な活動を開始し、建設学科に最適なカリキュラム、シラバスの再構築や、クラス間の習熟度に隔たりが少なく、英語学習に不可欠な学習の継続性の定着が図れる授業への改善を行うことが重要と考える。現段階では、直面している課題への具体的な取り組みを講師3名でよく協議し、積極的に提案していく。今後、学科の協力を得てひとつずつ改善することにより建設学科英語授業の学習効果に大きな成果が期待される。今後の各事例に関しては講師3名の共著で記録、発表していくことが望ましいと考え、そのためにもまず自己研鑽を怠らず調査研究を継続して行きたい。

文 献

- 1) 中鉢恵一：FD と英語教育,東洋大学「経営論集」73号 (2009) p.117-125.
- 2) 神本武征：ものづくり大学における FD 推進活動, ものづくり大学紀要第3号(2012) p.95-104.
- 3) 財団法人日本高等教育評価機構:ものづくり大学 平成22年度大学機関別認証評価 評価報告書, 財団法人日本高等教育評価機構(2011)
- 4) 文部科学省:FD の定義・内容について
available from :
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/06102415/006/003.htm
- 5) 金美紀：大規模 EFL クラスのクラスマネジメント改善のためのグループワークの応用, ものづくり大学紀要第6号 (2015) p.8~12
- 6) 鈴木政浩：英語授業における「楽しさ」の要因に関する研究, 関東甲信越英語教育学会誌第26号 (2012) p.1-13
- 7) 金美紀：建設学科における大規模クラスの英語授業にマルチメディア・ベースド・ティーチング手法を改善導入した効果に関するアクション・リサーチ, ものづくり大学紀要第5号 (2014) p.19~23
- 8) 大橋健治：チーム基盤型学習法の効果, 筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀第7号(2012) p.221-228
- 9) 坂田浩, 福田 T. スティーブ：継続的英語自立学習を支援するためのワークシート, 徳島大学国際センター紀要・年報(2011) p.14-24